

# 大学生にとっての居場所

平 修 久

## 1. 人生における学生時代という時期

「最近の学生は以前に比べると幼くなった」という発言をよく耳にする。これは、いつの世でも、「最近の若者は……」というフレーズに近い響きがある。

しかし、人生における学生時代の意味はさほど変わっていない。親や教師の庇護から離れ、友人がより重要になる時期である。すなわち、護り—護られるという上下のような関係から、対等という水平方向に人間関係が大きく変化する。家族という時間・場所よりも、友人と過ごす時間・場所の方がより意味を持つようになる。友人との付き合いなどを通して、人間関係の構築、継続や修復の方法を学び、社会性を身に付けていく。これらのことは、社会に巣立つ前に必要なことである。

他方、自我を意識し、自分の存在に疑問を持ち、自分探しをしたりする。自分を相対的に見るようになることで精神的に成長するが、時として、他人の目が気になったり、自分の位置が不安定で不安にもなる。そこには様々な経験や出会いとともに、失敗や挫折を味合うこともある。

学生時代において多くの時間を過ごす大学は、家庭を第一の生活と場と捉えると、第二の生活の場という位置づけになる。そこでの、友人、活動、たたずむ空間などが、学生生活の充実度合に影響する。友人と過ごす場所、将来のことを考える場所、自分の力を試す活動、これらを包含した居場所が重要となる。

本稿では、高校と大学の違いを確認し、居場所の一般論を概観した上で、聖学院大学における居場所を考える。

## 2. 高校と大学の違い

最近、幼稚園から小学校、小学校から中学校、中学校から高校へと進学する際のギャップが注目されている。当然、高校から大学への進学においてもギャップが存在し、それを克服するためには、高校以前とは異なる努力が学生にとって必要になる。

意思決定や行動パターンの面から、大学と高校では次の2点で大きく異なる。

第1に、授業の履修制度が異なる。高校までは選択科目はあるものの、基本的に定められた時間割に従って授業を受ける受動的立場をとる。しかし、大学では、必修科目はあるが、その他の科目の履修は個人の判断に委ねられている。そのため、各自が自分用の時間割を作成するという能動的姿勢が求められる。

第2に、対人関係の拡大・流動化が挙げられる。高校までは基本的に同じクラスに属し、毎日、毎時間、同じクラスメートとすごす。したがって、知り合い、友人はつくりやすい環境にある。大学においてもゼミなど比較的小規模な集団に所属するものの、ゼミは週1回、90分に過ぎない。そのため大学で知り合い、友人をつくるためには、学生自身が能動的に他者と交わるよう行動する必要がある。このように、高校生と大学生は求められる行動様式が異なり、大学生の方がより積極的かつ責任を持った行動が求められる<sup>1)</sup>。

入学早々に、他の学生と親密な関係を構築できた学生は、その学生と大学で多くの時間を共有する。学生同士の親密度が高まると、新しい仲間が入りにくいという状況になりうる。一方、待ちの姿勢から抜け出せない学生は、友人づくりに苦勞する。極端な場合は、授業以外、一人ですごすことになってしまう。一人で食事をしていることを他の学生に見られることを嫌う学生もいる。

### 3. 居場所とは

上記のような状況が大学で一般的に見られることから、大学においても居場所は重要になってきている。

そもそも、居場所をめぐる議論は、1990年代の不登校児童・生徒に対する支援に端を発している。すなわち、当初において、居場所は問題現象への対応措置として位置付けられた。代替りの場所や避難場所というように、やや後ろ向きイメージを包含していた。その後、居場所の捉え方の拡大と並行して、居場所の対象は、当初の児童・生徒から、成人や高齢者などあらゆる世代をカバーするようになった。すなわち、高校生や大学生の居場所にも関心が向けられるようになった。

居場所に関して、教育学、教育心理学、教育臨床学、心理臨床学などの観点から、多様な年代を対象にして調査研究がなされてきた。必要性や位置づけが変化する中で、居場所の分類がなされてきた。

数ある分類の中で、比較的早い時期の藤竹<sup>2)</sup>の3類型が比較的わかりやすい。また、則定<sup>3)</sup>は、心理的居場所感を分析する重要な尺度を抽出した。ここでは、藤竹の居場所の類型を、藤原<sup>4)</sup>の10類型でブレイクダウンするとともに、則定の心理的居場所感を当てはめてみることにする。則定による心理的居場所感とは、「自分らしくいられる」といった「本来感」、「役に立っている」といった「役割感」、「ありのままの自分を受け入れられている」といった「被受容感」、「落ち着く」といった「安心感」である。

藤竹は、人間にとっての「居場所」として、次の3種類を挙げた。

- ①自分の能力や資質を社会的に発揮することができる「社会的居場所」
- ②安心しほっとすることができ、自分が自分であることを取り戻すことのできる「人間的居場所」
- ③群衆の中で匿名的な状況になることで、自分を取り戻すことのできる「匿名的居場所」

社会的居場所は、藤原の類型でブレイクダウンすると、役割が与えられ

る・所属感や満足感が感じられる場、他者や社会とのつながりがある場、遊びや活動を行う場・将来のための多様な学び・体験ができる成長の場が含まれる。

このように、社会的居場所は積極的な意味を持つ居場所であり、初期の居場所の議論には見られなかったものである。社会に出る最終準備段階にいる学生にとって重要な能動的な居場所である。自分とまわりの人との関係、自分と社会との関係が意識される。自分の能力などを発揮する前提として、周りの人や社会に受け入れられる必要があるが、学生という身分なるが故、受け入れられ、また、失敗が許される場合が多い。

社会的居場所では、心理的居場所感として「役割感」が重要である。自分の役割を認識し、自己肯定感につながる。自分は必要とされている、自分には必要としてくれている人がいることを実感することは、学生にとって大きな勇気になる。

人間的居場所は、藤原の類型のうち、自由な場と、居心地がよく、精神的に安心・安定していられる場もしくは人間関係に細分類できる。心理的居場所感として、「被受容感」の他に、「本来感」、「安心感」を得ることができ、自由も重要な要素と言える。誰かと一緒にいることで安心できるという居場所もあれば、自分ひとり用の居場所もある。このような居場所では、自分の好きなことを行う場合もあれば、何もせずに時を過ごす場合もある。社会的居場所では、意識して自分をまわりや社会に合わせる必要があるが、人間的居場所では、無理せずに自分らしくいられる。言い換えると、仮面の自分ではなく、素の自分を出すことができる。自分を解放できる自由な空間といえる。

匿名的居場所は、藤原の類型のうち、一人で過ごせる場と、休息、癒し、一時的な逃避の場が呼応する。言い換えると、隠れ家、避難場所という意味合いを持つ場所と、失敗や挫折に向き合い、次へのエネルギーを蓄える自己再生の場所がある。前者の場合、居場所はやや消極的に捉えられるが、後者の場合は、マイナスからゼロかそれ以上を目指すための準備と

いう積極的な意味合いがある。前者の場合、人間的居場所と同様に、「安心感」が得られる。大半の場合、自分ひとりで過ごす場所である。

#### 4. 聖学院大学の居場所

高校とは学校での生活環境が大きく異なる大学になるべく早くなじむことが、新生にとって重要な課題である。したがって、入学早々の4月の学生の居場所感にとって、「被受容感」が最も重要となる<sup>5)</sup>。受け入れられているという感覚が、大学生生活の基礎になる。その感覚は、友人や先輩によりもたらされることが多いが、教職員が寄与することもありうる。

聖学院大学では入学前準備学習を長年実施している。当初は、高校までの復習と大学での学びの準備を主目的としていた。実際には、入学前に友人をつくること大きな意味を持つことから、2015年からはワークショップ形式を取り入れ、学生同士が協力し、互いを知り合う学びの場としている。また、入学式や新生歓迎の集いなどが、新生に「被受容感」をもたらす。その観点で、幼稚園から高校までと同様、上級生による新生の歓迎が重要な意味を持つ。

大学での生活に慣れてくると、やがて、「役割感」を求める学生も出てくる。そのような学生にとって、部やサークル、学友会、ボランティアなどの活動が居場所の役割を果たす。一方で、「本来感」や「安心感」が得られる空間を求める学生もいる。いわゆる、学内の自分の場所の確保である。

大学としては、多様な空間と、気軽に参加できるイベントなどの提供に努める必要がある。聖学院大学では、1号館に「1 café」が2016年春にオープンし、新しい人間的居場所になっている。一方で、深く意図しないで大学が提供している居場所もある。喫煙スペースである。休み時間になると喫煙者が集まり、にぎやかな居場所となっている。

このように、大学として人間的居場所は意図して提供できるが、匿名的居場所は、求める条件の個人的差異が大きいため、意図して作ることは難しい。

社会的居場所に関しては、ボランティア活動支援センターが、学生にボランティア活動を紹介することにより、居場所への橋渡しを行っている。また、聖学院大学のまわりの、商工関係者や兼業農家の方々は、学生に対する期待とともに、温かいまなざしで地域活動に学生を受け入れている。学生にとっては「役割感」を確認する場になっている。

「本来感」と「役割感」といった心理的居場所感が高い学生は、達成感、連帯感、自立感といった学校生活充実感も高く<sup>6)</sup>、今後とも、大学として多様な居場所の提供を心掛ける必要がある。社会的居場所の拡充については、地域の方々との連携・協力が必要であることを、最後をお願いとして申し上げたい。

## 注

- 1) 池田龍也、水口啓吾、高野恵代 (2015) 「大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検討：意欲低下領域尺度および学校ざらい感情測定尺度の因子構造について」『広島大学心理学研究』(15)、17-27 頁
- 2) 藤竹暁 (2000) 「居場所を考える」藤竹暁編『現代人の居場所』至文堂、47-57 頁
- 3) 則定百合子 (2007) 「青年版心理的居場所感尺度の作成」『日本教育心理学会第 49 回大会発表論文集』334 頁
- 4) 藤原靖浩 (2010) 「居場所の定義についての研究」『教育学論究』(2)、169-177 頁
- 5) 清島純江、古川雅文、山口倫史 (2011) 「大学キャンパス内における新入生の居場所に関する縦断的研究」『日本教育心理学会総会発表論文集』(53)、158 頁
- 6) 田島祐奈、山崎洋史、渡邊美咲 (2015) 「青年期における心理的居場所感に関する研究 -- 学校生活充実感と日常的意欲との関連を通して --」『學苑』(900)、58-66 頁